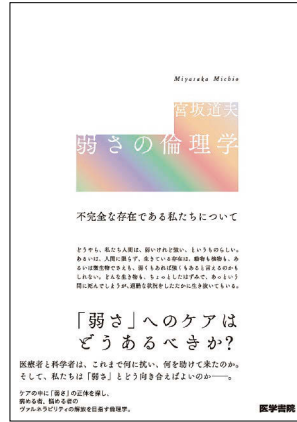


(書評者)
浦河べてるの家
向谷地生良

『弱さの倫理学 不完全な存在である私たちについて』

宮坂道夫＝著

2023年発行
2,200円＋税 医学書院



弱さの可能性を実感する

●「新しい力が湧き出てくる源は弱さにある」

「21 世紀」を目前にした 1999 年に、注目すべき一冊の書物が世に送り出された。それは『21 世紀へのキーワード「弱さ」 インターネット哲学アゴラ』（金子郁容・中村雄二郎 岩波書店）という本であった。

そのなかで、著者の金子・中村両氏が明らかにしたのが、社会が高度情報ネットワーク化することによって、「強いものが弱いものを保護するというやり方の行き詰まり」と、「逆に新しい力が湧き出てくる源は弱さにある」という“予言”であった。そこに必要とされるのが、「ネガティブとネガティブが合わさってポジティブになる」経験であり、そこに「弱さの強さ」の根拠と「弱さの思想」の基盤を見出そうとする視点である。

この本は、精神障害などを経験した若者たちと起業を目指して立ち上げた「浦河べてるの家」（1984）の活動理念「弱さを絆に」「弱さの情報公開」が、私たちの経験を越えて、時代を考える大切なキーワードである可能性を指し示してくれた気がする。

以来、数多くの“弱さ”本が、各方面の領域から世に生み出されてきたが、このたび著された『弱さの倫理学』も、「ケアの倫理」を、「弱さ」をキーワードに

掘り下げ、“自分ごと”にする手助けをしてくれる一冊である。

●倫理をめぐる揺らぎの最前線で

著者は「倫理」を、「弱い存在を前にした人間が、自らの振る舞いについて考えるもの」と仮定した上で、生命論、テクノロジー、自然科学、思想哲学の領域で倫理がどのように扱われてきたかを紹介しているが、これを読むと、時代の中で、常に「倫理」とは何か、何が大切なのかを巡る葛藤とジレンマとともに、社会の進歩があったことがわかる。この歩みに一貫しているのが「問題解決」や「リスクの軽減」と「倫理」との間に生じる相克である。特に医療・保健・福祉の現場に立つ専門家は、倫理をめぐる揺らぎの最前線に立たされていると言える。

それに対して、著者は新たな「倫理」の方向性を提示する。それは、伝統的な「弱さを克服する」ことに貢献する倫理から、「弱さを抱きしめる」ことに向けた倫理への転換であり、「弱さ」そのものに可能性と意味を見い出そうとする立場である。もしかしたら、それは現場に立つ私たち一人ひとりに託された、大切な当事者研究のテーマなのかもしれない。

精